



大田区立山王草堂記念館版 記念館ノート

洗足池の両英雄詩碑の除幕式 昭和12年(1937)1月17日頃撮影

徳富蘇峰(前列一番左)が中心となり、勝海舟と西郷隆盛の偉業を称えて建立した詩碑の除幕式。蘇峰の右側から順に、妻の徳富静子、勝海舟三女の目賀田逸子、孫の徳富久子が並んでいる。

創刊号

発行：2017年3月1日
編集：大田区立龍子記念館

館のトピック

◆代表作『近世日本国民史』

徳富蘇峰が著した『近世日本国民史』は、織田信長の時代から明治時代までを描いた通史書です。山王草堂で過ごした日々は、本作の執筆を中心として営まれました。

蘇峰は大正七年(一九一八)五十六歳の時に起稿し、三十四年という歳月をかけて、昭和二十七年(一九五二)九十歳にして執筆を終えました。全百巻の歴史書は、一一、七八一回の連作で、原稿用紙約十七万枚を超える大作となりました。蘇峰は明治天皇の崩御を契機として、明治という時代を後世のために書き残すため、本作の制作に至ったと言われています。蘇峰の独力によって、ほとんどの原稿を完成したことも注目値するところです。

本作で用いられている文献は、各時代の基本史料だけではなく、蘇峰が独自に蒐集した貴重な古文書・古典籍や、蘇峰が実際に見聞きした話に至るまで、実におびただしい史料が満載されています。

山王草堂記念館内で展示している本作の原稿は、第九十八巻の途中から第百巻までの二巻半を除き、その全てが蘇峰直筆のものです。



『近世日本国民史』とその原稿

平成29年度の予定

1. 展示内容のリニューアル

平成29年度中に現在の展示を部分的に更新する予定です。新たなテーマは、「徳富蘇峰と大森山王」(仮称)で、蘇峰が当地で過ごした時代を振り返りながら、彼の日々の営みを中心に上げるつもりです。蘇峰はどのような暮らしを営んでいたのか。是非、ご期待いただければと思います。

2. 学芸員による展示解説

展示のリニューアルに伴い、担当学芸員が展示内容についての解説を実施する予定です。施設や公園についての案内も企画しています。

※解説日の日時などが決まりましたら、別途告知します。

館の基本情報

《所在地》

大田区立山王草堂記念館
〒143-0023 大田区山王1-41-21
TEL 03-3778-1039
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/sanno>

《アクセス》

- ① JR大森駅より東急バス「上池上循環 内回り」「新代田駅前」行
 - ② 都営浅草線馬込駅より東急バス「上池上循環 外回り」「大森操車場」行
- いずれも「山王二丁目」下車、徒歩約5分

《入館案内》

- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで
- ※入館は午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 年末年始、臨時休館

山王草堂の建設とその時代

大田区立山王草堂記念館担当学芸員 乾 賢太郎

はじめに

徳富蘇峰（一八六三～一九五七）は明治・大正・昭和の時代を生き、多方面で活躍した人物である。例えば、日本で最初の総合雑誌『国民之友』や日刊紙『国民新聞』を創刊したジャーナリストとしての顔、大正七年（一九一八）の五十六歳の時から三十四年間をかけて『近世日本国民史』全百巻を執筆した歴史家としての顔が知られている。また、政治・経済・文学・芸術などの世界で名声を得た人々との交流があり、多分野にわたってネットワークを築いたことも見逃せないであろう。

さて、蘇峰は明治十九年（一八八六）に故郷の熊本から上京すると、赤坂の勝海舟邸の借家、青山に建てた山王草堂と住まいを変えた。大正十年（一九二一）十二月、蘇峰は『国民新聞』一万年記念事業として設立した国民教育奨励会の文化施設「青山会館」の建設計画を発表すると、会館建設のために青山草堂の土地を提供したのである。

蘇峰が山王に住居を構えたのは、大正十一年（一九二二）十一月のこと、それまで暮らしていた青山の邸宅を引き払った頃である。当時は山王草堂の建設予定地内で仮住いをしていたが、大正十三年（一九二四）五月には同敷地に邸宅を落成し、新たな生活を始めたのである。

一 蘇峰が転居した頃の山王

山王があった入新井町に大森駅が開設したのは、明治九年（一八七六）のことであった。当時は農家が暮らす農村であったが、明治二十二年（一八八九）に東海道線が全通すると、山王台地に住宅や別荘を建て、東京から移り住む政治家・実業家・高級官吏・高級将校などが増えていった。さらに、明治十七年（一八八四）には遊園地の大森八景園が開業され、明治二十年代には大森の八幡海水浴場や森ヶ崎鉱泉が開発されると、山王とその周辺地は東京近郊の行楽地・保養地としても注目されたのである。その後、大正五年（一九一六）に新井宿耕地整理組合が結成され、当地が

優良耕地へと改良されていき、山王台地もその間において耕地整理が進められた。

このような経緯の下、高台にあつて眺望の利く山王は、高級住宅地としてのイメージが定着し、大正時代以降に多くの政財界人や文化人が住まいを求めようになった。蘇峰も前述した周囲の環境を考慮して、山王の土地を選んだ人々の中の一人だったと推測される。

二 山王草堂の建設経緯

山王草堂の土地は、蘇峰が明治三十年代に新聞の売地の広告から、父の徳富淇水の保養や隠居のために購入した土地だったという（注1）。この土地は東西に長く、南北に狭く、小丘があつて起伏があり、東方に山王高台一帯の松林を望んだ（並木仙太郎「蘇峰先生の日常」）。

ところで、後に「成賞堂文庫」と名付けられた書庫（地下一階・地上三階）は、山王草堂の建設の前に着工していたようである。蘇峰は「書籍は既にそのところを得たから、予の一身だけは、ともかくも、家族とともに新築する家の傍らなる仮寓に托するも、差支え無しと考えていた」ので、建設中の邸宅の脇に仮住まいすることを決めた（徳富猪一郎「蘇峰自伝」）。しかし、大正十二年（一九二三）九月一日に起こった関東大震災の影響から、「地震後のこととて材料も乏しく、工員も少く、工事は思ふ通りには捗らなかつた」ため、山王草堂は地震後八ヶ月が経つてから完成に至るのであった（晩晴草堂同人編「徳富静子」）。

屋敷の建築には、青山の旧宅の部材が多く使われた。玄関や応接室は山王草堂のままで、蘇峰の書斎の二室は山王草堂における父の淇水の部屋を転用した。つまり、山王草堂は、

新旧の部材を繋ぎ合わせた建築物であつたと言えるだろう。階下階下の廊下は蘇峰の書斎を補完するスペースとなり、特に階下の方は書物の虫干しの適所にもなった（前掲「蘇峰先生の日常」）。

その他、敷地内には、蘇峰が蒐集した書物類を収蔵する「成賞堂文庫」、仮住まいのために建てられた「二枝庵」、蘇峰の次男の萬熊が集めた遺物などを保管する「牛後庵」が建てられた。

こうして、蘇峰とその家族による山王草堂での生活は始まった。蘇峰は昭和十八年（一九四三）六月に熱海の晩晴草堂へ転居するまで、山王草堂を中心に精力的な言論活動や執筆活動を行った。管見の限り、後者については約二十年間で初版本を一六〇冊以上も刊行するという偉業を成し遂げたのである。蘇峰の代表作である『近世日本国民史』は山王草堂時代に第十一巻から第七十巻までを発刊し、この数は全百巻の半分以上を占めるまでに至った。山王草堂での創作活動は、蘇峰が名実ともに充実した時期だったと言えるのではなからうか。

注

（1）『蘇峰先生の日常』には、「明治三十二年頃、蘇峰先生が不図東京毎日新聞の案内欄にて売地のあるのを見、淇水先生の山林遺遁の爲めに、買取られた千三百餘坪の雑木林である」と記されている。また、「山王草堂の蘇峰先生」には「ここは明治三十七、八年ころ、父君淇水翁の隠居所として然るべき土地を物色中、国民新聞に広告として持ちこまれた土地の売物を門下生の松岡彦野氏（この人は徳富家の執事として一生を終つた）に検分させ、買入れたものと聞いている」とある。

主要参考文献

- ・大田区教育委員会編『大田区の文化財第二十七集 大田区の近代建築 住宅編1』大田区 平成三年三月
- ・岡本正徳「山王草堂の蘇峰先生」荒木精之編『追想の徳富蘇峰』日本講談社、昭和二十三年十一月
- ・杉原志啓『蘇峰と『近世日本国民史』』大記者の「修史事業」都市出版 平成七年七月
- ・徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、昭和十年九月
- ・並木仙太郎『蘇峰先生の日常』蘇峰会、昭和五年二月
- ・晩晴草堂同人編『徳富静子』大日本雄辯会講談社、昭和二十九年十一月



山王草堂の概観 昭和初期撮影